

末黒野

すぐろの



12月号

(通巻928号)

早立ち

森清堯

默然と捷歩の僧やつくつくし
岩雲の統ぶる島々広島忌
秋風や野中の丈の草ばかり
はるかより風道みせて稲の花
秋暑し省略ばかり増やしをり
メモ用紙散らかる机上秋暑し
秋の風入れて落ち着く書斎かな
早立ちの声をつつしみ草ひばり
二百十日ガスメーターの新しく
秋の声水琴窟に耳聴く
コスモスを口元に寄す童女かな
店頭に並ぶ実石榴わめきさう

炎熱

岡野里子

風鈴や百の音色と百の舌
遅れたる句座へ牛歩や蟬時雨
炎熱や船に空爆受けし日も
腰に灸すゑて八月十五日
浴槽に溢るる水や敗戦忌
行合の空秋されの波の音
鈍色の低き棚雲秋暑し
帰るさの足に絡める残暑かな
眠らざる二百十日の八尾かな
芙蓉閉づいよよ目覚むる街流し
嬾やかに翳す手引く手風の盆
幼き恋林檎剥く手のおぼつかな

瑞声

蕎麦の花

黒滝志麻子
(顧問)

高原の鐘の鳴る丘小鳥来る
夕闇や包みきれざる蕎麦の花
みやしろの杜深きかな鴟高音
盛り上がる群青の海鳥渡る
石仏の傾むく一基赤のまま
消しゴムの四隅黒ずむ秋暑かな
牛の声までは隠せず霧深し
波音も肴のひとつ新走り

甲矢集

蝸

石黒興平

錯乱の蟬の打ちたる玻璃戸かな
愛し子をなだむるがごと罔鮎
蝸をしほに師の宅辞しにけり
泉亭の薄茶しみじみ秋の蟬
石庭の白砂に染みぬ秋の声
さざめく田を農夫見廻る野分かな
沼々をつなぐ木道草の花
鯉跳ぬれば雨の近きや処暑の夕
風に乗る里の匂ひや豊の秋
恥ぢらひを笠にて隠し風の盆

秋の蝶

太田良一

住み馴れてハマが終の地震災忌
慰霊碑へ影を刻めり秋の蝶
地図になき高天原や星祭
秋の灯を海に散りばめ出港す
空砲や運動会の終はりたる
秋の灯や第三橋に異国の灯
片雲の風に曲あり稲の波
がんばれの言葉は不要敬老日
剃り残す髭の白さや敬老日
常温や亭主無言の今年酒

魔法

小田嶋野笛

思ふほど冷たくは無し石枕
暑氣払病氣自慢を聞く会に
蝉時雨樺の林をふくらませ
孀恋の行合の空藤村忌
天上天下唯我独尊盆の月
三白眼二百十日の天気図に
モカ香る隣も独り秋の風
蝸牛管の奥の奥まで秋の音
魔法解く蜜の香りや林檎剥き
身を焦がす恋も知らざり初さんま

赤とんぼ

森清信子

旅立ちの早朝の富士秋気澄む
沢水の苔につまづき赤とんぼ
木洩日の映ゆる常滑つくつくし
本殿の溢るる秋気杉木立
拝殿に深き一礼蚊の名残
ぱつくりと折れし大枝そぞろ寒
駅前大洋展け秋高し
くつきりと水平線や渡り鳥
きしきしと白砂を鳴らし鱗雲
照りつくる椰子の並木や秋つばめ

乙矢集

配列は音順、月毎の循環



秋の蟬

大川暉美

真向ひの青嶺や被く白き雲
ペンキ塗の足場の幅木三尺寝
色尽す百日紅の花明り
八方へ畑の香散らす草刈機
荒草に風の生るや秋の野路
夕づくや杜に一縷の秋の蟬
草虱つけて腕白戻りけり

地藏盆

池乗恵美子

たまゆらの雨を宿して沙羅の花
北極に雨が降るとや秋暑し
タワマンの囲む路地奥地藏盆
真円の水輪を重ねまた一葉
爪紅の種がよく飛ぶ日和かな
俳句てふ無限の世界夜半の秋
影踏み影の無邪気や赤とんぼ

鉦叩

岡田史女

温め酒十五違ひのおとうとと
朝よりの雨の白露や白陀師忌
ふらつくは病か歳か鉦叩
治療法のなき病とや鱗雲
新涼の水清らなる滑川
方丈をつつと抜けたり赤とんぼ
夕風に吹かれて萩につまづける

けらつつき

高木邦雄

秋の天

池谷鹿次

朝靄の霽るる草原秋の駒
静寂なる寺領の杜やけらつつき
心友の訃を聞く夜やちちろ虫
畦径の暮るる夕空秋茜
夕さりの瀬田の唐橋律の風
爽やかな鳩の浦風朝ぼらけ
声明のもれ来る庭や木の実落つ

梵鐘の響きさみしや秋の暮
膝のぞくGパン行くや秋暑し
鳥取の砂丘に仰ぐ天の川
秋めくや航跡白きタグボート
綱引きの声吸ひ込まれ秋の天
穂芒の風のみちびく切通し
秋草や夕風荒ぶ河川敷

鎌の月

長尾タイ

秋の色

今村千年

古里へ続く鉄路や早稲実る
風ぎ渡る稲穂の波や雲の影
稲雀手を打つ音に五羽十羽
楠大樹百羽の群るる椋鳥の声
蜻蛉の睦みて叩く法の池
赤とんぼこの指止まれ野辺の道
終バスや山端に残る鎌の月

あかときの風の音色も秋めけり
あはうみの寄する波音水の秋
祇王寺へ嵯峨の細道竹の春
酒を酌む仕草嬾やか風の盆
昔かな空いつぱいの秋茜
稲刈りて村里少し軽くなる
人の世に日向もありぬぬくめ酒

青炎集

森清堯選



藤沢 宮澤靖子

新潟 五味紘子

もろもろの賞味期限や震災忌

令和五年越後よもやの早魃田

庭の花も常に加へて墓参

三日月の梢やしばし佇みて

瓜の馬サラブレッドのやうな脚

木洩れ日の潟湖を廻り曼珠沙華

どうみても肥満なるかな茄子の牛

緊張の学童の鎌瑞穂の田

河馬の口へ西瓜まるごと飼育員

風船葛飛び出しさうや壁覆ひ

一句なり捻りてみたき月夜かな

露草や押し花添ふる友の便

横浜 山口郁子

横浜 六崎正善

ぎこちなく撓む芒や穂孕みて

白球に湧き立つ歓喜秋茜

霧立つや声に遅るる人の影

薄雲の月こそ良けれ夜半の風

浮雲の行き合ふ空や風は秋

夕霧や雨降山の在り所

白粉花おごりて路地をせばめけり

明日に発つ都の空や秋燕

雨音消え虫のこゑごゑ闇深く

千の穂に千の水音糸のこ草

孫を師に学び直すや秋の夜

玄関に靴のあふれて敬老日

耕土集 岡野里子選



横浜 津野 桂子

横須賀 河野 礼子

くじ引きの子らの歓声納涼会

突風に耐へる葡萄の甘露かな

里山のつくつく法師肅々と

直売の枝豆の味濃かりけり

白桃を父のごとくに丸かじり

横浜 小林 拓路

川崎 木村 純子

新築の槌音高し秋暑し

爽籟や学内食堂ランチ時

台風の進路気になり旅予定

強風の中やコスモス立たむとす

なりなりて破芭蕉とはなりにけり

三浦 田中由紀子

秋夕焼富士の浮き立つ相模湾

やはらかき日差しの厨秋の声

薄紅の広がる雲や月の秋

見晴るかす霧の黒富士湖の風

江の島や端唄流るる秋の浜

秋茄子の生のサラダやあく抜いて

敬老日記念の品を配る爺

考も未だ生まれて居らず震災忌

二期やシニアの交通指導員

電子音押し寄す職場休暇明

爽籟や牧牛の寄る塩くれ場

客用のグラス磨ひて盆支度

本丸へ続く木立や蟬時雨

冷房や阿亀鸚哥の為につけ

祭果て水音のみの残る町

横浜 佐藤 勝代

失念の切ないものよ秋扇

手を取りて夫のリハビリ敬老日

墓参考妣と語る郷のこと

甘露の雨零るる小庭萩の花
道の駅嫁に土産の秋茄子

